



先祖の 怨み

川崎ゆきお

郊外の住宅地、すぐそこに山が壁のように立ちはだ っている。川が流れているが、昔は三本も四本もあったらしい。川の名を付けるのも忌まわしいほど氾濫し、川筋も違ってしまうためだ。今まであった川が消えたり、出来たりしているのだから、川の名などあってもなくてもいいようなものだ。

遠い時代、治水工事で氾濫はかなり治まり、豊かな農地となった。

「これが村の歴史だよ」

お爺さんが孫に話す。

「教科書にはないよ」

「郷土の歴史も副教材としてあるが、それにも載っておらんようじゃなあ」

「うん」

「その治水工事で新田が出来た。わたらの先祖はそこを耕した。百ほどの家がな」

「それで、百姓と言うの」

「違う違う。偶然百家族ほどが移住してきた村なんだ。さてそこからだ」

「何があったの」

「うむ、何かあったから、こうして話しているんだよ。ここから先は郷土史家も知らぬ。何故なら、一切口外せんかったからじゃ。村の者は村外の人間には喋らん」

「知ってるよ。水争いだろ」

「新田の前に、以前からあった村との争いじゃ。これは、従うしかない。新入りはな、今の正岡のことだよ」

「正岡に友達がいるよ」

「仲良くしておるのか、それはそれは」

「何か問題でも」

「もうないがな」

「何々？」

「水不足のときは、水をくれなかった。しかし、従うしかない。それが原則でな。この鉄則は曲がらん。だからわたらの先祖は随分へりくだって、正岡の機嫌を取ったものさ。正岡もそれを知っておるから、難題を言うて来た。牛をよこせとかな」

「訴えればいいんだ」

「そういう掟なんだ」

「それで、お爺さん達は我慢していたの」

「ああ、三百年以上な。今でこそ、もう農地もなくなったんで、水もいらん。水道があるしな。しかし怨念だけは残った」

「それが、何」

「これは、口で伝え続けられたことでな。当主が跡継ぎだけに伝えるんだ。正岡は敵だとな。いつか痛い目に遭わせてやれと」

「じゃあ、正岡の小ちゃんと喧嘩するの」

「もうそんな必要はないが、先祖代々の怨みじゃ。ずっと正岡には頭が上がらんかった。何処か

で仕返ししたい。それを伝え続けておるのだ」

「へー」

「しかし、昔からの農家はもうなくなったしな。村時代からの住民は僅かじゃ。我が家は村長の家系。だからお前に伝えておる」

「うん」

「お前の親父は聞く耳を持たん。物騒な話なのでな。それで、お前に託す。一応伝えたぞ」

「それ、どうするの」

「今度、お前の息子に伝えるんじゃ。孫でもいい。跡取りにな」

「それだけでいいの」

「ああ、もう伝えるだけの意味しかないがな」

「じゃ、正岡の小ちゃんと遊んでもいいの」

「いいよ。もう怨みも何もないから。それに正岡は正岡で、その上手の高橋村に怨みがあるらしい」

「高橋のケンちゃんとも仲良しだよ」

「もう、正岡にも高橋にも頭を下げる必要はないがな。わしも怨みはないが、先祖がなあ。それを思うと、くやしくてくやしくて」

「僕も悔しがった方がいいの」

「年を取ると、そう思うときが来るかもしれんぞ」

「ふーん」

「さあ、わしの役目は終わった。後はお前が引き継ぎなさい」

「次の代に伝えるだけでいいんでしょ」

「まあ、そうじゃ。それだけのことだ。今はな」

「うん」

「ただ」

「何」

「下流の荒俣は新々田でな、あそこはわしらの村に怨みを持っておるはず。気をつけるんじゃ」

「荒俣の利ちゃんともよく遊ぶよ」

「だから、気をつけるんだ」

「ふーん」

了